

## ずいそう



## 転勤あれこれ

和泉 裕

サラリーマン生活も30年を過ぎ、人生を季節に例えれば早や、晩秋と言った処でしょうか。学生生活を終える迄、ずっと郡部とは言え東京で暮らした身からは転勤による暮らしの変化は、仕事環境の変化ばかりでなく、先々での興味深い経験をもたらしてくれました。

昭和45年4月入社、実習のため石川県粟津工場へ(転勤では無いが、東京以外での初めての生活)。事務系出身者にとっては、初体験の組み立てラインや溶接ライン、機械加工ラインでの仕事、鋳造場での実習、実験場での重機の運転と、今から思えば製造現場を知る貴重な経験をしていたこととなります。

業後に海水浴へ出かける余裕と意欲もあった様に記憶しています。休みには、兼六園の桜の花見や同僚の車で能登一周の旅等と、若さ故の行動力もあって充実した実習生活を過ごしました。当時、一番暮らし易い季節での生活とは露知らず、後々、雪と寒冷地と言う未経験の「季節」から思いもかけない洗礼を受ける事となります。

最初の配属地東京では13年間に及ぶ勤務となり、転居もした数年後の昭和59年9月、金沢勤務を命ぜられ、ようやく初めての転勤となりました。その年は、10月、11月と北陸では珍しいとされるポカポカとした秋晴れの日が続きました。しかしながら、12月初旬、憶えておられる方も多いと思いますが、所謂「59豪雪」の年でした。

朝、出勤の為の駐車場の雪かきを必須とし、それも遅刻せぬ為の夫婦総出(?)での雪かきでした。大通り迄出る為の僅か10メートル足らずの除雪作業は結構大変であり、人の力の頼りなさを痛感しました。「スノーダンプ」なる物の存在を初めて知る事となりました。当たり前ですが、雪は何処にでも均等に降る。誰の上にも公平に降る。決して、通路や自分を避けては降って呉れない。雪の経験の無い身で知った「教訓」です。

その年は、国道8号線の通常除雪が不能となり牽引力の大きいブルドーザまでも出勤しました。一刻も早い納入が要求され、除雪用重機の到着督促の為に支店で一晩過ごした事、夜遅く、地吹雪の中、能登海浜道路を恐々走った事など雪国ならではの経験を積むこととなりました。正月元旦の雪の兼六園、雪を冠した白山の遠景、何ゆえ電話ボックスは階段付きで高い処にあるのか。この後、ずっと「雪」は小生のサラリーマン生活に切れない縁があるものとなります。

東京に戻り、次の転勤は平成元年7月、新潟勤務です。今度はお定まりの単身生活の始まりです。新潟と言えば雪国、特に、水やお米、お酒に魚が美味しいと良く言われますが、仕事は別

物である、とは当然の事であります。新潟の季節は雪解けを経て、先ず、5月初旬の田植えに始まり、秋の稲刈りで一幕が終り、稲刈りの終わった田んぼ（地元では日常水田などとは言わない）を白く染める雪で二幕が始まるといった感じに思われます。弥彦山（位置情報を得る）を頼りに車を運転出来るのも好い天候の時のみ、一転、広大な越後平野で雪が降り出すと視界が遮られ現在地と方向が判らなくなります。

事故にはならなかったものの、雪道での脱輪は、その後、念には念を入れての運転を心掛けるきっかけとなっています。新潟での暮らしの印象は、冬の空が青空では無いのが、何年居ても違和感が抜けません。又、何故、冬の新潟で観るテレビの天気予報の画面が「何時も雪降るスキー場」なのだろうか。

東京へ戻り、次の転勤は平成6年8月、岩手県盛岡勤務でした。何故か、常に転勤に気象が絡む事となり、盛岡の夏はクーラー要らずと言われていたにも拘らず、その年の夏は、50年振りの猛暑とかで、9月末まで夏日、真夏日が続く異常気象でした。夏も終り、盛岡の冬、これも又、何十年振りかの酷寒とかで、市内でも気温-10度が続き、太平洋側へ出る峠では-20度にもなり、折しも、スパイクタイヤの使用禁止となった時期でもあり、道路はミラーバーンと言った状況で、これまた広い県内での冬の運転は、ひたすら忍耐に継ぐ忍耐と覚悟したものです。

オウム地下鉄、阪神淡路大地震、三陸沖地震等々、様々な事が起きた年でもありました。未だに、「我が東軍」と言う言葉を身近に聞き、植林から100年以上も木を切っていない小岩井農場、活火山の岩手山麓の露天風呂、三陸の海や海の幸と、思い出深い土地の一つとなっています。最長の3年8ヶ月の盛岡勤務も無事終え、平成9年12月、再度の新潟勤務となりました。同年10月23日全面開通の“海から海”への雪の磐越道を利用した移動でした。

転勤することにより特に家族と離れて暮らさざるを得ない単身赴任はサラリーマンの宿命とも言われ、必ずしも人生に好い面ばかりをもたらすものとは言えないと思います。只、土地土地での仕事上に限らない様々な人達との出会い、知らなかった風土との触れ合い、そこでの食文化、歴史等々、数知れない新しい経験の積重ねによって、また、離れているとはいえ家族のあることの有りがたさ、これらによって、現在の自分を育んでもらったように感じます。このことは同じ境遇を経験されたご同輩皆様の等しくご賛同いただけるところではないでしょうか。

転勤当初は、敵対すべきもの、負荷だけと思い込んでいた雪ですが、それと葛藤を繰り返している間に、お互いの理解が深まり共存共栄ができるぞ、と自身が受け入れられた気分になっています。自分としては、転勤により、暮らした夫々の土地に好い思い出を持ち、其処が、又訪れたい、暮らしたいと思える場所ばかりである事を幸せな事と思っています。ここに、新潟での暮らしも通算7年目を迎えました。

インフラが進み雪国に明るさと落ち着きを感じています。毎年繰り返される田んぼの営み、広い県内を巡る高速道路、国道、県道、地方道のこれも繰り返される冬の除雪作業によって、道路機能が維持されており、その有り難さを実感しています。とりわけ、我が事言えば、盛岡からの移動での“海から海”への磐越道、これらは転勤先に暮らして判る無駄とばかり単純には言えない公共の為の投資ではないかと。